



交通安全教育で安心のまちづくり 静岡県警の取り組み

ソウル事務所所長補佐 塚本 敦（秋田県派遣）

はじめに

静岡県には全国でも珍しい「外国人交通安全教育指導員」が存在します。静岡県在住の外国人に交通ルールの教育を行うこの制度は、平成19年に静岡県警が導入しました。平成21年にこの仕事に就いたのがサンパウロ生まれの日系ブラジル人、片野幸子さんです。片野さんが活動の拠点にするのは浜松市。ブラジル人をはじめとする南米系外国人が多く暮らしているところです。勤務先の静岡県警察本部西部運転免許センターを訪ねました。

少しでも事故を減らしたい

現在では在住ブラジル人の人口は減少に転じていますが、平成19年当時はまだ多くいました。しかし外国人を起因とする事故のうちブラジル人が原因となった事故は非常に多かったのです。自らもトラックの運転手の経験を持つ片野さんは、以前から交通ルールが守られていないと感じていたといいます。

「以前から不幸な交通事故には胸を痛めていました。私はトラックを運転していて危ない目にあったこともあります。ブラジル人によるひき逃げ事故があった頃、ちょうど外国人交通安全教育指導員のことを知りました。交通安全は日本人、ブラジル人を問わず共通の問題。とても重要です。私はポルトガル語を生かして在住ブラジル人の皆さんの事故を少しでも減らしたいと思ったのです」。

また日本とブラジルでは道路事情も違うといいます。

「ブラジルでは道路の真ん中にブロックを埋めてUターンできないようにする、横断歩道や交差点の手前ではロンバーダといってわざと道路にカマボコ型の突起を設けて減速させるといったことがあります。日本にはそういったものがない。個人が交通ルールを守るという意識が求められているのだと感じていました」。

また、「日本は右ハンドルですがブラジルは左と反対です。それにブラジルは道路が広く、信号のない交差点も多いのです。また交通標識も違います」。運転を取り巻く環境そのものが違うのです。さらに「日本の運送業は競争が激しいこともあり、仕事のストレス、休みが取りにくい、家族と離れて暮らしているといったイライラがたまり、それが運転に出ることも多いのです」。

ブラジルで取得した運転免許があれば、日本で比較的簡単に切り替えすることができます。景気の悪化は在住ブラジル人に悪影響を与えましたが、運転免許を持っている人は帰国せずに残っています。運転手の職があるからです。ハンドルを握る人がいる以上、交通安全教育は今でも大きな課題として存在しているのです。

子どもたちに楽しく教えたい

静岡県には、現在、財団法人静岡県交通安全協会の職員として174名の交通安全指導員がおり、県内の各警察署に配置され、警察と連携して各地域の実態に即した交通安全教育を実施していま

す。

片野さんは、県内のブラジル人をはじめとするポルトガル語を使用する外国人に対する交通安全教育を充実させるために、県警察の非常勤嘱託職員として静岡中央警察署で一カ月の研修を受けたあと、正式に採用されました。主にブラジル人学校や事業所等に出向いて教えることが多い片野さん、「教える内容の基本は日本人向けと同じなんですよ」と言いますが、教えるために様々な工夫をしているといいます。ある日の現場を訪ねました。

ここは静岡県内のイベント会場。小学生から中学生の子どもに片野さんが交通安全指導をしています。子どもは全員ブラジル人です。最初は自転車の乗り方に関するマルバツクイズです。「13歳未満の人は歩道を自転車で走ってよいか？」答はマル。「横断歩道では自転車から降りずにそのまま渡ってよい」。答はバツ。子どもたちは大はしゃぎでマルとバツの間を往復しています。「ルールばかり話しても子どもたちは聞いてくれない。楽しく教えることが大切なのです」と片野さんは言います。

次は動物のキャラクターが出てきました。「歩行者は右側通行ですか？左側通行ですか？」との問いに「空いているところならどこだっていいんじゃないの？」との答え。これには子どもたちが「違いまーす!!」の大合唱。正しいのは子どもたちです。動物のキャラクターは片野さんからピコピコハンマーで厳しくお仕置きを受けます。これには子どもたちも大笑い。「楽しいのはいいこと。でも楽しくしすぎて度を外してはいけません。その加減が難しいですね」と片野さん。

そして実際の自転車を使って乗り方と注意事項を指導します。自転車は左から乗りましょう。ブレーキは右だけかけると危ない。13歳未満の子どもはヘルメットをかぶりましょう。子どもたちは真剣な眼差しで聞き入っています。「7歳から10歳まではパワーポイントを使うことが多いです。



実際に自転車を使って指導



外に出て正しい横断歩道の渡り方を指導

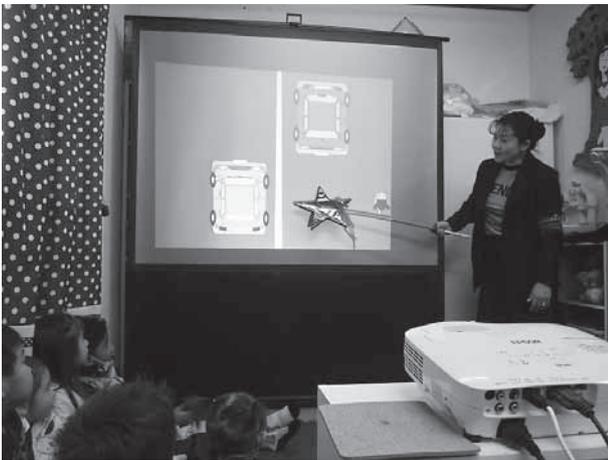
高校生になったらビデオに加えて実技指導が多くなります。大人はビデオとパワーポイントです」。通常の交通安全指導員が日本人向けに使っているものを少しアレンジしてブラジル人がわかりやすいようにしているのです。

「子どもよりも大人の方が質問が多いんですよ」。ただし大人の質問は罰金や免許の停止についてのもの。とても現実的です。運転手を職業としている人にとっては身近で深刻な問題なのでしょう。「ちょっと交通安全教室の趣旨とは離れてしまいますね」と片野さんは笑います。質問に備え、大人相手の時は警察官にも同行してもらおうです。

また外に出て子どもたちに横断歩道の渡り方を指導することもあります。「子どもの人生がかかっています。小さいうちに正しい渡り方を教えておくことが大切なのです」。



教材を使って指導



子どもたちに画像でわかりやすく

外国人交通安全指導の現在

最近の不景気は交通安全指導にも暗い影を落としています。職を失って帰国するブラジル人が増えました。それに伴い浜松からブラジル人の子どもが減っているともいいます。以前は浜松駅前にたむろしていた多くのブラジル人も、今ではほとんど見ることはできません。ブラジル人学校も生徒が減っています。県から援助が出ているのはほんの数校。月あたり約4万円の学費負担は重くのしかかっています。

そして事業所も景気が悪く、交通安全指導を受け入れる機会が減っているといいます。「景気が悪く、経営者も忙しくて余裕がなくなっているのです。しかし交通安全には子どもの命がかか

っています」。最近、片野さんは交通安全指導をするためブラジル人の多い事業所を調べて交通安全指導イベントの開催を提案して回っているといっています。「電話帳で調べて、ここと思うところを訪ねるのです。でも『経営が大変で交通安全どころではない』という反応が返ってくると悲しくなります」。

最近、この外国人交通安全教育指導員は他県にも広がる動きを見せています。また行政側だけではなく在住ブラジル人側が中心となった動きもあります（地域国際化フォーラム2011年1月号“交通安全は歌とダンスに乗せて”参照）。

1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正によりブラジル人労働者が日本にやってくるようになりました。それから20年以上が経過し、外国にルーツを持つ人たちと共存してゆく時代になりました。

「ブラジル人に対する交通安全教育は、結局日本人のためでもあります」と片野さんは言います。交通安全は安心して住める多文化共生のまちづくりの原点の一つなのです。最近ではブラジル人の定住化の傾向が強くなっています。片野さんのお話をうかがっているうちに、これはブラジル人の定住化にも即したものだと思いました。つまり子どものうちに交通ルールを覚えれば、大きくなってハンドルを握るようになっても交通ルールを守りながら歩行者に対する思いやりを忘れない大人になれるだろう。交通安全教育は子どもの命を守ることであり、安全運転のドライバーを育てることでもあるのです。

「交通安全教育でみんなが安心して住めるまちづくりの役に立ちたい。一人でも多くの人に交通安全教育を受けてほしい」。安全安心のまちづくりのため、外国人交通安全教育指導員による交通安全指導はこれからも続くことでしょう。